「神に喜ばれるために」　　母の日　　２０２２年5月８日

テサロニケの信徒への手紙一４：１～１２

５月第２週は「母の日」として教会の行事に定められていますので、テサロニケ書を学びつつその後、「母の日」のお話をさせていただきたいと思います。

聖書の見出しにあるように、「神に喜ばれる生活」とは一体どのような生活でしょうか。テサロニケの教会は、今まで見てきたようにマケドニアにあるのです。マケドニアはギリシャの北部にあります。今も地図を見るとマケドニアという地名はあるのです。この手紙が執筆されたころは、パウロが第２回目の宣教旅行に出かけた時でした。その頃、ギリシャはユダヤ人が多く住んでおり、パウロは彼らにイエス・キリストの福音を伝えようとしました。少数の人たちが信じ、小さな集会が生まれました。けれど、迫害も強かったので、パウロは次の伝道地、コリントに向かったのです。ギリシャはその頃は文明都市でローマの領地でしたので、ローマの文化が色濃く反映されていたのでした。「すべての道はローマに通ず」という格言にもあるように、都市国家ローマの地図を見ると本当に道があらゆる国から伸びてローマに向かっているのです。そのように文化都市で栄えていましたが、道徳的倫理的にはしたいことをする廃退した文化でした。

一方、教会ではイエス・キリストの再臨・来臨についての正しい信仰が定着しておらず、パウロは彼らを導く必要があったのです。４章の１節でパウロはこのように言っています。「どうか、その歩みを今後も更に続けてください」と語っています。パウロはテサロニケの教会の弱さや欠点を十分知っているけれど、注意したり、叱ったりせず、彼らをまず受け入れています。テサロニケの教会の人々は安心するでしょう。ここら辺にパウロの牧会的配慮があらわれます。

パウロがこの手紙で述べていることは、もうすでに主イエス・キリストが福音で語っていることなのです。その当時の有閑な人たちは、何か新しいことを聞いたり話したりして時をつぶしておりパウロの語る死者のよみがえりは一笑に付されてしまったのでした。しかし、神から霊を注がれた人たちは信じたのです。その中にはアレオパゴスの議員ディオニシオやダマリスという婦人やその他の人々がいたのです。アレオパゴスは、青空集会所という意味なのですが、（使徒言行録１７章参照）海に面している半島の部分に岩を切って階段式にして話が聞けるようになっている集会所のことなのです。時折そこで裁判も開かれていたようです。その裁判に出る議員ですからディオニシオは身分のある人なのでしょう。神のなさるわざは不思議です。知識人には笑われ相手にされなくても、霊を注がれた人は心が開かれるのです。

テサロニケの信徒への手紙４章３節からが本題になります。パウロは子供に諭すように教えています。「実に神のみ心はあなたがたが聖なる者となることです。すなわちみだらな行いを避け、おのおの汚れのない心と尊敬の念をもって妻と生活するように学ばねばならず」とあります。思うにテサロニケの教会のクリスチャンたちは、教会に行く前にはローマ

の文化の気風の中で生活していたのでしょう。倫理的にも習慣的にもそのような文化になじんでいたでしょう。「みだらな行い」とありますが、せっかく教会に入ったクリスチャンも慣れてくるとだんだんこの世的になり、よっぽど注意しないと聖なる者が、次第に堕落していく場合もあるでしょう。みだらな行いというのは性に対して慎みがないことです。別な訳では不品行とも訳されています。その当時のギリシャの世界では割合、性に対して無頓着な人々がいたかもしれません。それでパウロは心配したのです。ここでのポイントは「聖なる者」です。その当時、教会と他の宗教との違いは何かというと、聖なる者かどうかなのです。教会が異教の中で伝道が進展したのは、クリスチャンたちが世俗に対して一線を引いて聖なる者になっているということなのです。日曜日に教会で神さまを礼拝し、月曜日には世俗の人々と同じ不品行な生活をしていたら証にならず、世人は尊敬しないでしょう。クリスチャンたちが異教の社会にあって高められたのは５節にあるように「神を知らない異邦人のように情欲におぼれてはならないのです」というパウロの教えを守ったからなのです。もしパウロの教えを守らなければ、教会は踏みつけにされ、落ちたでしょう。世人と何の違いも無くなるのです。

日本にも厳しい時代がありました。振りかえって、日本に初めてプロテスタントの教えが伝わったのは、１８５６年ですが今から１６６年前のことです。キリシタン禁制の高札が降ろされてから、アメリカ、イギリス、オランダの各宗派の教派とも言いますが、の宣教師が来日したのです。彼らは主に武士階級に伝道しました。それで、日本のキリスト教徒は真面目で勤勉でというイメージが生まれたのです。けれど今では、その気風が次第に緩やかになってはいますね。いいのか、悪いのかわかりませんが。昔は、クリスチャンは、禁酒禁煙の方が多かったらしいですが、今は牧師もタバコを吸いお酒も飲みます。５節に「神を知らない異邦人のように情欲におぼれてはならないのです」とあるように、踏み外せば６節に書かれていますが「このようなことで、兄弟を踏みつけたり、欺いたりしてはいけません。わたしたちが以前にも告げ、また厳しく戒めておいたように、主はこれらすべてのことについて罰をお与えになるからです」と言っています。

神に喜ばれる生活とは一体どういう生活か。一つ目は聖なる者として生きなさい、ということ。二つ目は兄弟姉妹をお互い愛し合いなさい、ということ。三つめは主の来臨を信じなさい、ということ。その三つの教えを守ることが神に喜ばれる生活なのです。

今日は「母の日」でもあるので、お母さんを偲んで教会のすぐれた初代教父であったアウグスチヌスの母についてお話したいと思います。アウグスティヌスは３５４年１１月に北アフリカのタガステというところで生まれたのですが、今、アフリカと聞くと未開発の土地と思いがちですが、その頃は開けた文化都市だったのです。皆さん方はもしかしたら、もうご存じかも知れませんがもう一度覚えてもいいのではないかと思います。このアウグスティヌスは、お母さんが熱心なクリスチャンであり、子供の頃は親と一緒に教会で育ったと思います。お母さんの名前はモニカと言います。ところがアウグスティヌスは、頭脳はいいの

ですが、非常に早熟な子供で若い頃から放蕩に明け暮れ、モニカの祈りの子であり、また涙の子でありました。ある女性と交際し未婚のまま 15 年間も同棲し子供まで得たのでした。けれどその子は、後で亡くなっています。彼は２９歳の時、イタリアに行きミラノで弁論術の教師をするうちミラノの司教アンブロジウスや母モニカの影響を受けて３８７年洗礼を受けクリスチャンになったのでした。受洗する直前、不思議なことが起こりました。彼がミラノの書斎にいる時、隣の家で子供たちが遊んでいたのです。その時遊んでいる子供たちがこういうのです。「取って読め、取って読め」（Tolle,lege　トレレゲ、トレレゲ）そういう声が聞こえたというのです。机の上に聖書があり、丁度「ローマの信徒への手紙」１３章１３－１４節が開いてありました。そこにはこういう御言葉があったのです。「日中を歩むように、品位をもって歩もうではありませんか。酒宴と酩酊、淫乱と好色、争いとねたみを捨て、主イエス・キリストを身にまといなさい。欲望を満足させようとして、肉に心を用いてはなりません」そこを読んだ時、彼ははっと気が付いて、いままでのことを懺悔し回心したと言われています。きっと神さまからの霊が降ったのだと思います。でなければどうして回心出来るでしょう。今までの彼だったらば、読んでも素通りだったと思う。きっとそこに聖霊が働かれたと思うのです。このように、神さまは、ご自分が救おうと思われる人を救われるのです。自分で自分を救うことは出来ないのです。神の一方的な恵みによって人は救われます。今日もここに私たちが招かれて礼拝を捧げています。自分で来たのだからと思うかもしれないけれど、そうであったならば何回か来てもう終わりになるのではないでしょうか。毎週毎週、神さまは、お一人お一人名前を呼んでくださっているのです。でなければ何で何十年も続けられるでしょう。

アウグスティヌスはキリスト教史で大きな役目を果たしました。この人がいなければキリスト教はどうなっていたかもわからないことです。異端がはびこる中で福音を正しく導きました。彼は３９１年３７歳の時、司祭になり、３９６年に司教に選出され聖職者として叙階を受け、神学者としてよい働きをしました。この偉大な人は、母の熱心な愛と祈りに応えて教会に生涯尽くしたのです。

１１節にあるように「そして、わたしたちが命じておいたように、落ち着いた生活をし、自分の仕事に励み、自分の手で働くように努めなさい」と教えています。この教えは生活の基本中の基本ですね。初代教会のクリスチャンは、主の来臨が近いと考えていて、中には、不届きな人がいたのです。どうせ主が来られるのだから、何もあくせくして働かなくてもいいのではないか、パウロは兄弟を愛しなさいと言っているのだから、働かなくても人に頼って生活すればいいのだ、と考える人も出てきたのでした。そうすると批判も出てくるのです。パウロは、主の来臨が近いと言って、仕事もせずに騒いだり他人に迷惑を掛けたりすることはせず、静かに落ち着いて普段の生活をしなさい、与えられた仕事に精を出し、手を使って励みなさい、と教えたのです。そしてどこから見ても良き善良な市民として過ごしなさい。そうすれば伝道の良き証となるでしょう。そして、何一つ欠けることのない独立の生活をしながら伝道しなさい、このことが信仰者として本当の信仰生活なのだ、と諭したのでした